

体験談「日記と歩みつづけて」



古川喜代子さん

私は小学生時代に作文を先生に褒められた時に書くことが好きになった。結婚、育児を一通り終えた頃から着付け、書道に熱中し、いろいろな出会いを重ねてきた。島代表には「生涯大学」で生徒として出会い、日記にかけの思いを熱心に話されたことが強く印象に残った。その後「とどろき公民館」での講座「自分史を書こう」講師に島代表の名前を見つけて迷わずに受講した。書くことへの熱意が掻き立てられ、また日記も書き始めた。そんな時に店頭で「白い本」(二見書房)を見つけた。毎日つける日記から好きな漢字を一字拾い出しこの白い本に筆で書こうと思いついた。書道の師より「毎日書くことが上達の道」と教えられたこともきっかけになった。平成18年元旦から始めたが、4年前から「日記ろまん」に掲載を依頼され10回の連載を終えることが出来た。今回「一字日記」13冊、日記2冊、「プラスアルファー(自由日記)」も展示して頂いた。感慨深く感謝の気持ち一杯である。

★「十九周年のつどい」が六月十三日、八千代市東南公共センターホールで、百名もの参加者を得て盛大に行われた。まず秋葉就一八千代市長さん、伊藤伸子さんから祝辞を戴き、続いて島が「来年は二十周年、豪華絢爛たるつどいにしたい、元気ががんばります」と挨拶した。

また古川喜代子さんは「日記と歩みつづけて」と題して日記との縁を落着いた口調で堂々と語られた。展示頂いた「一字日記」は墨跡美しく見事なもので、じつと魅入る人から感嘆の声が上がった。

「日記熟読総集編」は前年度に「戦中戦後の日記に学ぶ」をテーマに行った日記塾五回、「聞かせて あなたの戦中戦後」一回をまとめて披露するもの。

「戦中戦後の日記に学ぶ」

に心あつめて

代表・島 利栄子



第63号

女性の日記から学ぶ会 代表 島 利栄子

〒276-0046 千葉県八千代市 大和田新田 469-123 TEL・FAX 047-459-9464

事務局



挨拶する島代表

職場での喜びや不満、帰宅してからの自炊生活、忙しい合間を縫っての映画鑑賞、労働争議の記述も多く当時の世相をうかがい知ることが出来るが、二点に関心を持った。1. 平野さんと読書。「電軍」の中で『石坂先生行状記』を読む(二月十九日)「機械課文庫から借りて来た、パール・バックの『大地』を読む」(十一月四日) 2. 戦争と平和。朝鮮戦争勃発の年ならでの感慨(忌避感)。「戦争破棄平和国家の夢は餘りにも短いような気がする」(六月三十日)

「平野仁蔵日記」一九五〇年から歴史を読む…伴野文亮

日記から五つの柱を考えた。1. 平和の受け止め方。「四十一歳の春」第一日はかくも平和に、和やかに、希望を以て迎える事が出来たのだ。独身者の正月も亦あながち見捨てたるものに非ざらぬ(二月一日) 2. 日常生活。3. 娯楽。「深更、人皆寝静まり来たる様子。己の部屋のみ煌々と明るく、かかる時物思ひ、物を繕く、誠に我が此の上なき楽しみなれど、如何せん。明朝の早き出勤に支障を来さん事をおそる」(二月十一日) 4. インフレ。5. 職場での労働の苦勞と喜び。

「平野仁蔵日記」一九四八年について……吉見義明



鈴木せつ子さん書簡「父の教え
母の愛兄弟との絆」…長田松代

昭和十八年せつ子さんが飯田女に入
り父母から書簡が届くようになる。立
派な皇国女性になり、勉強をして女医
になるよう願う文面である。しかし、
二十年に次兄が戦死し、二十三年に父
が急逝。次いで母も病気に倒れ、せつ
子さんの戦後は介護、就職と激変した。
戦争がなかったら…と、私自身も父親
を戦争で亡くしたので、平和を願わず
にはいられない。「諸先生の教えを守
り立派な皇国婦人となり、戦線の兵隊
さんと同じように皇国にお報い参らせ
る様、懸命な御努力、くれぐれもお願
い致します」(昭和十八年十一月十一日)

「松本幸日記を読む」主婦の戦
後…島秀光、松本喜美子

軍人を夫に持つ松本幸さんは戦時下
の日記と変わって、家庭を中心とした
日常生活の記述が多い。一家四人の毎
年の誕生日、家庭野菜づくり、購入
食材、配給、料理、編み物、各人の体
調などである。戦争に関わる感想、地
域社会への参加の記述は見当たらな
い。軍人の妻としてのプライドで戦争
に関わる思いは胸の中にぐっと納めて
しまったのだろうか。「誕生日と声を
高くして宣言しておく。誰も頓着して
くれぬ故。おいならずし、カスタード
プリン…当時としては最高のご馳走に
てなり」(昭和二十四年五月十九日)

飯塚とみ日記(昭和二十年～
二十二年)を読む…大木めぐみ、
荻原利花、田中祐介、柳井三津

飯塚日記は昭和二十年七月から平成
元年まで六十三冊が会に寄贈されてい
るが、今回は昭和二十年から二十二年
までの日記を四人で読み解いた。戦中
から終戦直後の日記には実家を焼かれ
て学業を断念した口惜しさ、しかしつ
きせぬ文学への憧憬など思春期の少女
の心の揺れと生活、また慣れない電話
交換手の苦勞、苦しい食糧事情もしば
しば記される。戦後の国家への不信感
も随所に見られる。「聖戦もへつたく
れもあるものか。ああ、特攻の若死に
も無駄、我々国民の苦難困窮のいばら
の八年間も水泡にきしてしまった」(昭
和二十年八月十五日)

「聞かせて あなたの戦中戦
後」鈴木千代子さんの戦中戦
後…小園崇明、比江島大和、
舟津悠紀、伴野文亮

西村榮雄、松本喜美子、塚本昌芳さ
んに続く「聞かせて…」企画の第三
段である。会員の鈴木さんの日記と平
成十年に出版した『石楠花』を照らし
合わせながら、ご自身の体験・記憶を
伺った。鈴木さんの戦後は大変な食糧
事情、その中で体調を崩した母親の介
護をしながら熱心に洋裁を学んだこ
と、その当時の苦勞や焦りについての
話があった。



会場風景



司会・渡辺明さん 島秀光さん、松本喜美子さん



長田松代さん 伴野文亮さん 吉見義明さん



左から小園さん(楓ちゃん)、舟津さん、鈴木さん、比江島さん



柳井三津さん 荻原利花さん 大木めぐみさん 田中祐介さん

八千代市立中央図書館開館記念 日記展と市長・代表トーク



★八千代市立中央図書館・市民ギャラリーが完成し、七月一日に開館の日を迎えた。開館を祝う様々な行事が催されたが、当会もそれに協賛し「日記展」と秋葉就一市長と島代表のトークショーを行った。新図書館は新川沿いの川と緑に囲まれた静かな環境で、乳幼児・子供から高齢者まで幅広い層が学び合える場であるように設計されている。閲覧席も三百五十と千葉県下二番目に多く、軽食もできる。

★私達が日記展を行ったのは白と赤のモダンな配色のグループ学習室である。一面には会の活動の歴史を伝える展示を、一面には八千代市の宝ものといえる「平野仁蔵日記」全七十冊を展示した。一日から五日までの期間に約百七十人が訪れ、平野日記に驚嘆、感動していた。村松洋一理事長は日参して熱心に平野日記を紹介した。

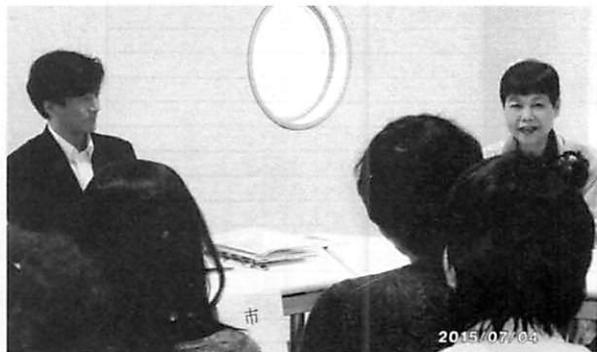
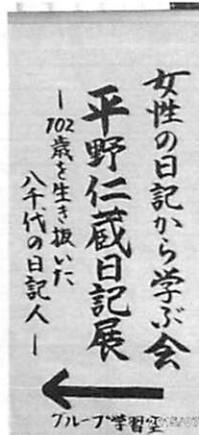
★四日には秋葉市長と島代表のトーク「日記と歩む過去・現在・未来」が行われた。約四十人を前に市長が活動の動機、歴史、意味、課題などを質問し、島代表が答えるという気軽なもの。会員も多く応援に駆けつけ率直な意見を出した。最後には「会の活動は全国的で誠に意義深いもの。今回の素晴らしい催しを見て益々そう感じこんな活動が八千代市内にあることを誇りに思った。今後は八千代市がこの図書館を会の活動の場、展示の場、保管の場になれるよう応援してほしい」という意見も出された。市長も「出来る限り協力したい」と答えた。

★今回の協力は準備期間も短く会員の皆さんへのお知らせも不十分なものはあったが、多くの市民に会の活動を知ってもらう良い機会となった。

これを機に従来島宅で行っていた日記目録作成作業を、八月から新図書館学習室へ移した。広々としたグループ学習室は参考図書も揃い、軽食飲食もでき願ってもない環境。今後は、ここの学習が軌道に乗るよう対応していきたい。



「八千代市にこんなすばらしい日記が!?!」



秋葉八千代市長と島代表。なごやかにトーク



Diary

平野日記を読む

伴野 文亮

一九五〇(昭和二十五)年



今回は、第七十八回日記塾(二〇一四年十月八日)での報告をもとに、一九五〇(昭和二十五)年の平野日記の内容と、その魅力の一端を紹介したい(文中、差別的な表現がみられるが、史料用語としてそのまま使用した)。当時の平野さんは、石川重工業に勤務していた。まだ結婚はしておらず、時折体調を崩しながら単身労働者として生活していた(なお平野さんの詳しいプロフィールについては、前号までの「日記ろまん」を参照されたい)。

◆平野さんの日常生活

【食事】

食事は、ほぼ毎日、うどんかパンを食べていたようである。ある日の夕餉をのぞいてみよう。

終業帰宅の途上、豚肉五十円、牛

旁人参六十円、石鹼五十円、卵一個と二百円余の買物をして戻った。夕食にウドンを煮て、肉のおかずは腹一杯に食べ、明日の活動のエネルギーとなす。(二月五日)

当時の平野さんにとって、肉のおかずとうどんを食べることで、明日を生きたるための活力を養っていたことがうかがえる。このほかにも、お汁粉を食べていたことや(三月十五日)、「豚肉とキヤベツを共にいためたもの」(四月五日)を食べていたことが日記には綴られている。

【娯楽】

働きつめの日々のなかにも、つかの間の休日があった。休みの日、平野さんは家でゆっくりすることも多かったが、外出して映画を鑑賞することもしばしばあったようである。

有楽町にバスを下りて、ムービ銀座に入った。本日封切りの映画「エデンの海」を見て八時半頃帰宅した。(中略)夜、床中の人となり、吾が歩み来し一日を省みて其の感情や如何。四十を過ぎし男、映画を見て満足す、か噫々。(十月十四日)

この日平野さんは、有楽町の映画館で、若杉憲の小説を原作にした映画「エデンの海」を鑑賞した。夜、帰宅してから布団の中で感傷に浸る姿にも、つかの間の休日を満喫したことがうかがえる。日記にはこの他にも、大相撲を観戦したり(五月十五日)、弟・千代吉さんの家に遊びに行つて休日を過ご

したことなどが記されている。

【教養】

当時の平野さんは、向学心に満ち満ちていた。三月九日の日記では、「英語と習字をもう少し本格的に学び度いがどうにもならぬ」と述べている。

六時半頃に家に戻り、身体も疲れず餘り睡くもない故、それから亦少々英語を学ぶ事にした。機関々條の勉強もしたかつたのだが欲許り多くて仲々思ふやうに行かぬ。然し、英語又はどうしても、もう少し学んでおかぬと後日大いに困るやうな事に出食すと思ふ故、終戦以来五ヶ年、今度々と遂に果し得なかつたのを埋合さう。(十月二十四日)

ここからは、仕事から帰つた後に英語の勉強をしたことがうかがえる。本人は「身体も疲れず餘り睡くもない故」というが、労働者として一日中肉体勞

《平野さんの読書履歴》

日付	書名など
2月19日	『石中先生行状記』を読む。
3月20日	読書をした旨記載(書名は不明)。
3月30日	文芸春秋を読む。
4月1日	文芸春秋を読む。
4月7日	『乱れた書物を一々読みさして』と、読書していた旨記載(書名は不明)。
4月10日	日記に啄木の短歌を引用。
4月15日	『新聞が未だ配達されない時は鞆の中に入れてあるなんかの書を開いて読むことにする。自分の落付いた読書の時間はこれ文である。』と、出勤前の電車内でも読書していた
4月21日	『二三日前書庫に於て、三木清著作集を掃き、巻頭に掲げありし原稿の文字を記憶記憶深く感じて、多分に其氣持にて此の日記を記す。』と、三木清の言葉に感銘を受けた旨記
5月26日	『転落の歴史』を読みながら過去を回顧。
5月28日	日比谷図書館に行った旨記載。
6月5日	『潜行三十里』を読む。
6月7日	『潜行三十里』を読む。
6月10日	辻政信の『ガダルカナル』を読む。
6月12日	文芸春秋を読む。
7月18日	『チャタレイ夫人の恋人』を読む。
7月21日	『チャタレイ夫人の恋人』を読む。
7月23日	『チャタレイ夫人の恋人』を読む。
8月1日	『チャタレイ夫人の恋人』を読む。
8月3日	『チャタレイ夫人の恋人』を読む。読了し、河上肇の『第二貧乏物語』を読み始める。
11月4日	パウル・バックの『大地』を読む。
11月5日	パウル・バックの『大地』を読む。
11月6日	小説を読む。
11月7日	小説を読む。
11月12日	読書をした旨記載(書名は不明)。

働をしたあとである。平野さんの知的欲求の高さがうかがえよう。戦後の厳しい生活のなかにあつても、勉学、とりわけ英語の学習意欲を強く抱いていたことが読み取れる。

また四月十日には、石川啄木の「はたらけどはたらけど猶わが生活楽にならざりちつと手を見る」という短歌の一部を引用しながら、実生活の苦境を日記に綴っている。何気ない日記の一文に文学が溶け込んでいるところに、文学青年だった平野さんの教養の高さが垣間見えよう。

◆読書の日々

日記を繕いてゆくと、平野さんにとって書物が日常的にありふれたものだったことがわかる(表参照)。

『石中先生行状記』は、青春小説『青山脈』を著した石坂洋次郎による、

連載 4

私の読んだ 平野仁蔵日記

田中 順子

昭和三十年

四十八歳(下)・骨身を削る思いで働く



十月五日の記述には重労働であるがやり甲斐がある仕事だと次のように記している。

「新造船鉄隆丸の試運転。一時間早出して六時五十分入門。鉄隆丸の試運転に搭乘。此処一、二ヶ月全く骨身を削る思いで働いた。船が漸く試運転にこぎつけた此の感慨は当事者以外に誰れが解し得やう」

今号は昭和二十年十一月から働いた石川島造船第二工場での様子をお伝えしたい。

一月二十一日

この頃八時のサイレンと同時に職場に行かなければならなくなった。命令や恫喝によって工員の身体を駆使しようとしても能率増進にはならぬ。

五月十四日

今日一日働くと明日は日曜日。此の頃身体の疲労を甚しく感じる為もあるうがつづく厭気を覚えて仕方がない。一年中騒然たる中で右往左往して何物かに追るるが如く落着かぬ気持で働くのが何んとも堪えられぬのだ。

五月二十八日

給料日。会社に向ふ足取りも何時もと違って活気がある。仕事をしても苦にならない。手取り一万九千六百七拾円也。帰り大丸アパートで管子のおもちやと水筒、お茶、菓子を買って帰宅する。

昭和30年 給与表

月	手取金額	特記事項
1月	19,318	無尽落す約 10,000 円
2月	18,400	都民税 2,000 円天引
3月	18,519	
4月	記述なし	
5月	19,670	時間外 53.5 時間
6月	21,940	
7月	記述なし	夏期手当 14,200 円
8月	20,000	
9月	16,000	残業 82.5 時間
10月	記述なし	
11月	記述なし	
12月	19,900	懐中に 40,000 円有り

ボーナス総額 25,300 円 税金 6,072 円 手取り 19,200 円

六月三日

午に班長氏からモデル・シヨップ運動の話あり。結局は我々が感じるのは労働強化以外の何物でもない。生産を挙げよ!と云ふ前に厚生方面をもっと早く整備せよ!と叫び度くなる。

八月十三日

残業、徹夜と造船所の工員は全く健康など無視して働かねばならぬ。家に戻って涼しい夜風に吹かれ乍らラチオを聞いて居ると血を流すやうな苦闘の

一日を忘れて暫し陶然とするのである。

九月十日

毎日此の混乱の中で働きつづけるのかと思ふと厭になつてくる。これが未だ若かつたら如何に働くとも疲れを知

平野さんが手掛けた船

12/29	10/31	10/24	10/5	8/8	8/1	5/28	6/3	5/12	4/25	4/18	4/7	2/10	1/7
ライオン進水	タイペイ号	グレイス号	ライオン進水	グレイス号									
ライオン進水	タイペイ号	グレイス号	ライオン進水	グレイス号									

らぬやうな元気な時代なら此んな気持ちも起らぬであろうが、一日の労働をやつと持ちこたえる位の体力だ。

十月二日

六月から初めて手掛けた新造船「鉄隆丸」は、余り各機関の詳細を知らぬ自分

には中々の気苦労である。然し詳細に究明し納得の行く時は何んとも云い知れぬ愉悅に浸る。

おわりに

平成十五年の「日記ろまん」二十五号は平野日記の特集。島代表との対談のなかで「平野さんは何故日記を書くのでしょうか」の問いに「日記を止めると自分の足跡がとだえてしまつという妄想になつているのでしよう」と語っている。明治・大正・昭和・平成と激動の時代を生きて、百二歳の天寿を全うし、七十三冊の日記を遺した。

明治四十年生まれの文学青年は大正デモクラシーの時代の空気のおかげで青春時代を過ごした。漱石の『坊ちゃん』、『草枕』、『こころ』、泉鏡花の『婦系図』、田山花袋の『蒲団』等々が明治末から大正にかけて発表され、彼の知的好奇心を大いに刺激したに違いない。

記述文のなかに文学的表現が随所に見受けられる。(終)

昭和三十年	五月	二月	十八日	十一月	五日
...

連載
3 「女性の日記から学ぶ会」二十年の歩み
未来に続く活動をめざして

《中期Ⅱ（平成十八年～二十二年）》

島 利栄子

★十周年を祝う

平成十八年。十周年を祝う三つの事業を行った。「十周年のつどい」は松崎宗子日記を題材に戦時下での夫婦愛を伝える朗読劇「黄水仙」の上演で祝った。さんべいむつこさんら若い女優さんの手による脚本・演出・音楽に会場は酔いしれた。

二つ目は「女性の日記から学ぶ会」関係資料目録を作ったこと。歴史年表と比較して見られるような個性ある作

りで、一千部発行。無料配布した。

三つ目は特別号「日記ろまん」(第三十五号)発行である。二ページ増やし「華麗なる十年」を見開きで作成し活動の歩みを俯瞰できる工夫をした。さらに日記塾、史料班、日記展、会報と各部の活動を写真も多く入れて振り返り、全国会員からのメッセージも豊富に掲載した。

巻頭では作家遠山あきさん、また山口県マツノ書店主松村久さん、さらに



関係資料目録

ろまん特集号



10周年のつどい



大橋愛子さんキルト完成。会員の名前が縫い込まれている



12周年のつどい

「日本日記クラブ」小谷信子会長から「地道な活動に敬意を表する。『女性の日記から学ぶ会』のネーミングがぴったりの活動。社会に上手にアピールしながら質を高めている事に感嘆!」と祝いの言葉を戴いた。十周年の感動は多くのマスコミにも注目され、NHK十曜ジャーナル「女たちの戦争―日記が刻んだ記憶」の協力へと続いた。

★「庶民の日記展」「安曇野日記展」「姫路平和資料館」「吉田得子日記の里へ」

この年(十八年)残暑の残る八月に「庶民の日記展」を「日本日記クラブ」と合同で東京の高橋書店で十日間開催した。日本日記クラブの皆さんと力を合わせて展示したり交流させて頂いた。共に日記の魅力を信する同志との共同認識も持てた。残念ながら、日記クラブはこの後、閉会、四十年の活動に幕を下ろした。

翌十九年三月には信州安曇野で「安曇野日記展」を行った。友人の石田武秀氏の経営するそば処・信州坊主を使って信州関係の日記をお披露目した。本山修一郎氏など高校友人たちの協力で賑やかな展示会、講演会となった。

同六月には姫路市平和資料館「子どもたちが記録した日常」展へ鈴木千代子、松本喜美子日記を貸し出したため、その見学と、吉田得子日記の里を訪ねる旅に出た。総勢十名を超える大旅行だったが、姫路では鎌田芳寛会員、瀬

戸内市邑久では正高瑞圃さんご一家の歓待を受けた。得子さんのお墓にも参り出版を心に誓った。

★戦時下の手紙への関心―出版へ

会の大きな財産の一つが太平洋戦争時代の手紙や日記である。日記塾での発表、十二周年のつどいでの展示などを通して出版への道が開けた。平成二十一年六月、十三周年のつどいでは『手紙が語る戦争』の出版を祝うことが出来た。長田松代さん、御前政明さんから戦時下の様々な立場の十一人の手紙を紹介し、みずのわ出版社長・柳原一徳さんが撮影した実物写真を多く載せ臨場感を出した。戦争によって普通の暮らしがいかにか破壊されるか、平和がいかに大事かを静かに訴える一冊となった。翌二十二年八月には佐倉一里塚にて「手紙が語る戦争展」を開催、好評を博した。(次号に続く)



13周年のつどい 祝「手紙が語る戦争」

本表紙▶



★「十九周年のつどい」、秋葉市長様のご臨席もありご盛会であったことお慶び申し上げます。若い人が育つてくださるのは嬉しいことです。日記ろまんに平野仁蔵様の様々な年代の日記が発表されてお人柄が分かってきました。平野様の戦中戦後の日記からは同時代を生きてきたものには頷く点が多く、また若い父親時代の日記からは子供達に向ける愛情が伝わり感銘を受けました。今日の若いパパ達が平野様の生き方に学びの多いことを願います。

古い自身の日記を読み返し、日記を書き続けた尊さを、そして日記の会におられる有り難さをかみしめております。

(京都市・大野英美子)

★「十九周年のつどい」では大変お世話になりました。早速写真を送つてくださりありがとうございました。楽しい会でした。「古川様の書」本物を拝見して素晴らしいとよく分かりました。つどいの当日お見せしようとして行つた親友からの葉書のコピーを送ります。昭和十八年八月(前橋高女四年)。夏休み中の勤労奉仕と旅行と読書のこと一枚の葉書に詰め込まれていて驚きました。それと何て難しい本を読んでいたのかしらとびっくりしました。市立図書館の貸出票も送ります。

(前橋市・伊藤伸子)

★つどい時の写真をありがたうございました。平野仁蔵氏は読書家でいらしたと記憶していましたが、氏の本の入手方法の一つが会社の「文庫」と知つてうれしかったです。私は図書館勤務歴が長かつたものですから。それと島代表の近著『親なき家の片づけ日記 信州坂北にて』は感動しました。友人達に勧めます。四冊送つてください。

(八千代市・小山俊子)

★十九年前に「見たこともない種」を蒔き始め、花を咲かせ、しっかりと根付かせた島代表及びスタッフの皆様にもエールを送ります。二十周年を目前に益々の発展を祈念します。

(市原市・神戸典子)

★先日マスコミの人が来て『山国からやってきた海苔商人』を手にとつて奥付を見て気付きました。平成三年ですね。島さんが信州にこだわり始めて四半世紀になるんですね！その中で日記活動も二十年になろうとは。改めて敬服しております。来年二十周年には体調を整えてぜひ出席したいと夢見しています。

(塩尻市・高橋将人)

★会報を拝読するだけの会員ですが、何時も皆様のご活躍に活気を頂いております。感謝しております。

(山口市・秋本シゲ子)

★会報六十二号拝読致しました。平野仁蔵日記のことよくわかりました。実に魅力的な人物ですね。会員の皆様の健筆にも驚かされます。

(佐倉市・清水勇男)

伝言板

★今後の予定

- 十一月十一日(水)研修会・少し早めの忘年会。場所は「東京都復興記念館」「東京都慰霊堂」(両国)。JR総武線両国駅西口に十時集合。当会青年部長代理・小園崇明氏が案内。希望者は片岡事務局長へ。
TEL090・6038・6743
- 十二月九日(水)定例会。特別講演。八千代市男女共同参画センター 十三時より。講師、演題は未定。
- 一月十三日(水)二十周年に向けて『二十年の歩み』(仮)校正作業。
- 二月十日(水)定例会。『二十年の歩み』校正作業。
- 三月十日(水)定例会。『二十年の歩み』校正作業。

★「二十周年のつどい」

平成二十八年六月十一日(土) 佐倉市ウイシュトンホテル・ユーカーリにて行うことになりました。たたいま豪華絢爛たる祝賀会になるよう計画を練っているところ。大勢のご参加を念じております。

- 会費一万円(昼食付き)
- お土産は出版本『二十年の歩み』
- 宿泊希望はウイシュトンホテル宿泊可能。対応いたします。

詳細は三月中旬「日記ろまん」六十四号発送時に併せて、ご案内状、返信はがきを同封させて頂きます。

来年のことですが、スケジュールに入れておいてくださいね。

★会費納入をお願い致します

振込先「女性の日記から学ぶ会」 島 利栄子
郵便振替口座番号 00110・0・351560
入会金：千円 年会費：二千円

★会員ご逝去

師岡一郎さん	平成二十七年一月	宮原止幸さん	同一月
笠原徳さん	同一月	根尾睦子さん	同四月
丸山鈴子さん	同八月		

生前のご厚情に感謝し謹んで冥福を祈ります。